

works (=) documents

前川 紘士

2018.3.31

vol.0

enoco[study?]#5プログラム参加期間[2017年12月14日(木)～2018年3月31日(土)]の中で、自身の過去プロジェクトの資料を基にしたリサーチを行なった。その中で得た情報、行なった実践の一部を資料化し、公開可能な状態に編集したものととしてここにまとめる。

本資料集の構成は以下、

- 「目次」にある個別の項目(A～Mの資料)はそれぞれ独立し、それらの集合として本資料集は成る。
- 「vol.0(2018.3.31 アップロード分)」は整理済みの一部を公開。その後一定量の資料がまとも次第、随時追加される。
- 「vol.0」発行後に行われるリサーチから得られる関連資料も、今後追加予定。
- 公開に向けた整理作業が進んだ際、また今後、リサーチ・資料が追加された場合、項目が新たに追加/統合/分化/削除される可能性がある。
- 各項目の結びつきや関係は固定的でなく流動的。

資料の共有可能部分の一部公開により、リサーチの広がり、第三者との共有と、活用を通じたフィードバックを得ることを目的とする。

[2018.3.31 前川紘士]

なお、プログラム参加期間のプロセスに関しては、別紙「enoco[study?]#5実施報告書」を参照(2018年度enocoウェブサイトに掲載予定)。

目次

A アトリエ=資料室

B 過去プロジェクトデータ(2007～2017)

C enoco周辺の再開発・歴史

D 大阪の文化行政

E 大阪府20世紀美術コレクション

F 木村重信

G

H 作品群=資料群例

H-1 福祉

H-2 教育

H-2-1 作品群=資料群例 ARTCA芸術教室 岸和田教室 (私塾)

H-2-2 作品群=資料群例 高槻市第三中学校 (公教育)

H-2-3 青森件八戸市

H-2-4 近代の美術教育の歴史

H-3 心理学

H-4 人類学

H-5 治療

I ひと花プロジェクト美術の時間 資料群

J アートリンクプロジェクト・HAPPY SPOT FUTURE 作品=資料群

K たがわ 作品=資料群

L age book

M works (=) documents

A

アトリエ=資料室

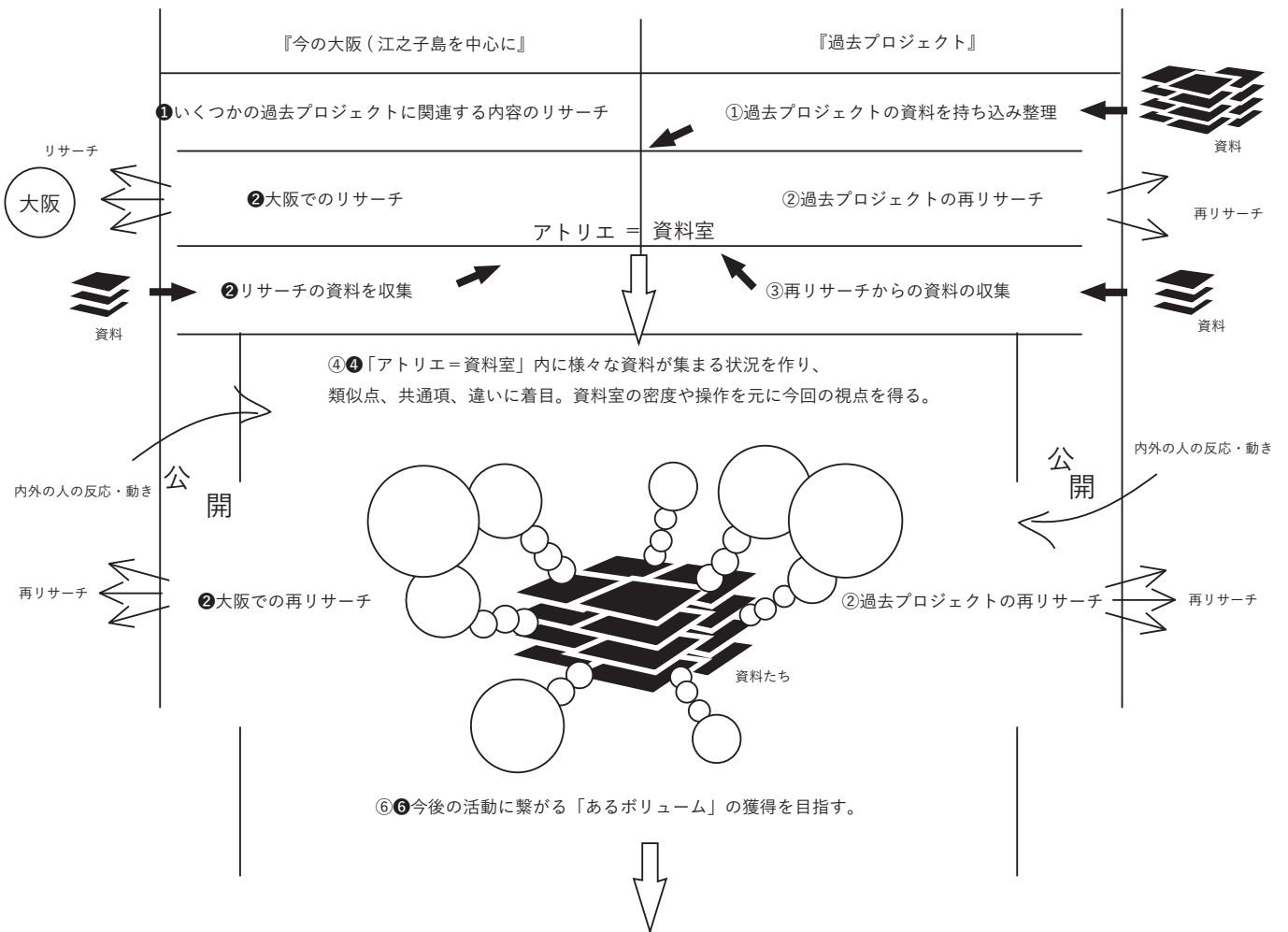
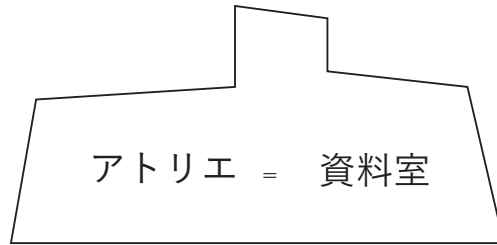


enoco[study?]^{#5}のプログラム参加にあたり、使用スタジオスペースに過去10年分のプロジェクトの資料を持ち込み、その振り返りと、そこへ新たなリサーチとそれに付随する資料を追加し、それらの中から新たにプロジェクトを立ち上げるプランを提出した。

使用できることになったenoco 2階のルーム9を[アトリエ=資料室]と仮に呼び、そこに様々な資料を持ち込む中でリサーチを進めていった。

enoco[Study?]^{#5} (2017-2018)

大阪府立 江之子島文化芸術総合センター /enoco



A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

大阪

ひと花プロジェクト (2013~)

西成区単身高齢生活保護自給者の社会的つながりづくり事業
NPO法人 こえとことばとこころの部屋(cocoroom)

たがわ福祉センター海萌 (2017~)

社会福祉法人 関西中央福祉会

奈良

アートリンク・プロジェクト (2011~2012)

奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2011-2012
社会福祉法人あゆみの会 オープンスペースAYUMI
財団法人たんぼぼの家

HAPPY SPOT FUTURE (2017)

国民文化祭2017 / 障害者芸術祭2017
財団法人たんぼぼの家
社会福祉法人わたぼうしの会

京都

半外プロジェクト (2008~2009)

公益社団法人京都保険会 京都民医連中央病院

Basic Income Kyoto (2013~)

Social Kitchen
同志社大学

CITY IN MEMORY - 記憶の街 (2013~2014)

文化庁若手芸術家育成事業 山出淳也ワークショップ
堀川団地
京都市立芸術大学 堀川御池ギャラリー @CUA

むこうスタジオ (2011~)

仕掛け景色 (2007~2010)

その他 プロジェクトなど

台北
台湾

Treasure Hill Artist Village (2012)

トーキョー・ワンダーサイト
(現 トーキョーアーツアンドスペース)

嘉義
台湾

Banana Villa Residency (2014)

様々なレベルでの協働

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

B 過去プロジェクトデータ (2007～2017)



enoco[study?]^{#5}の最初期に持ち込んだ過去プロジェクトに関する資料の基本情報。2007年から2017年に行なったプロジェクトの情報を、作品情報とそれが実施されたプロジェクト情報に分け記載。

Night walk in RAKUSAI
(2007)



作品タイトル：Night walk in RAKUSAI(2007年)

形式：ゲリラパフォーマンス／写真

素材：ビニール袋／写真

解説：ビニール袋で作ったスプレーやテープ、バケツ、ブロックといった身の回りのものを夜中のニュータウンに仕掛け、その状況を写真で記録した。

展覧会名：平成18年度京都市立芸術大学制作展

展示場所：京都市立芸術大学制作展
第3会場 学内展 彫刻棟

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

仕掛け景色
(2010)



作品タイトル：仕掛け景色(2010年)

形式：映像インスタレーション

素材：ビニール袋、アスファルト、木材、スクリーンx2、
プロジェクターx2、換気ファン

解説：ビニール袋で偽の落し物を郊外の景色の中に忍ばせ、
風でそれらが徘徊する様子を撮影した。それらの状況を
擬似的に共有する為の展示状況を作り出した。

展覧会名：京芸Transmit program #1 きょう・せい 第二期

展示場所：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

半外プロジェクト
(2008-9)
犬のいる風景
(2009)



作品タイトル：犬のいる風景(2009年)

形式：仮設の公共彫刻

素材：色画用紙、モーター、鉄フレーム／ポストカード

解説：通りに面した病院の扉のないスペースに、1ヶ月間限定で巨大なハリボテの犬の顔を吊るして回した。後にその時の様子を撮ったポストカードが病院内外で配られ、記憶と噂の中の景色に居つく事を目指した。

展示場所：京都市立中央病院 半外スペース

プロジェクトタイトル：半外プロジェクト(2008-2009)

プロジェクトの場：京都市立中央病院

プロジェクトの主体の構成：病院の依頼を若手作家3人で構成される半外プロジェクトチームで受け、マネジメントもプロジェクトチームで行なった。病院内には専属のマネジメントのスタッフはおらず、窓口として20周年記念事業実行委員会が対応する形で行われた。個別の作品は3人の作家がそれぞれ提案・制作。リサーチやワークショップ、プロジェクト全体の運営はチームで行なった。

主催：京都市立中央病院

企画運営：半外プロジェクトチーム／
高橋和広 田中良 前川紘士

備考：病院の20周年事業として行われたプロジェクト。当初は銅像制作の依頼から始まり、病院にある空きスペースで何が出来るかを探るプロジェクトを逆提案して行われた。

アートリンク・プロジェクト
(20011-12)
「D50」の時間
(20011-12)



作品タイトル:「D50」の時間(2011-2012年)

形式:協働制作とその成果・記録の展示

素材:ミクストメディア

解説:奈良市内にある障害者福祉施設「オープンスペースAYUMI」に通う那須大輔と前川とでペアを組み3ヶ月間の協働制作を行なった。思いつく様々な制作方法を端から可能な限り試していき、可能な限りその記録を取った。ほぼ全ての成果と記録とを合わせて発表した。

展覧会名:奈良県障害者芸術祭
HAPPY SPOT NARA 2011-2012

展示場所:奈良文化会館

プロジェクトタイトル:アートリンク・プロジェクト
(2011-2012年)

プロジェクトの場:オープンスペースAYUMI / 奈良文化会館

プロジェクトの主体の構成:実施運営を行う奈良県障害者アート創出事業実行委員会が企画を構成。参加施設や作家は公募。施設の協力(コーディネーターによる連絡・調整など)により運営。回数や内容はペアによって決定。予算管理は外部から来た作家が主に行なった。

主催:奈良県

実施運営:奈良県障害者アート創出事業実行委員会(財団法人たんぼぼの家)

備考:障害者芸術祭の企画として、奈良県内の福祉施設に通う参加者と外部の芸術家のペアが10組作られ、約3ヶ月間の協働制作を行なった。各福祉施設には施設職員がコーディネーターとして付くことが課せられており、全てのペアは、成果を展覧会という形で発表した。アートリンクプロジェクトという方法はアメリカのcreative clayというアートNPOが行い、日本でも奈良だけではなく各地で行われている。

Treasure Hill Artist Village
風景に同期する-台北
(2012)



作品タイトル：風景に同期する__台北(2012年)

形式：パフォーマンス／ビデオ

素材：ビデオ

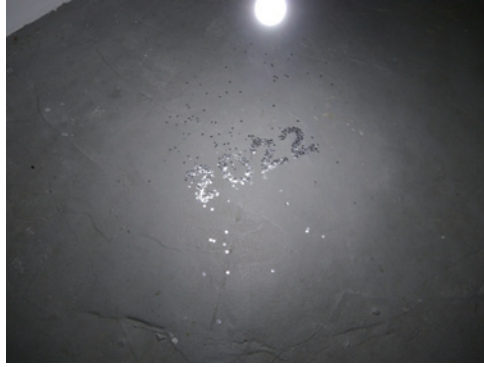
解説：パフォーマーが2人並び、同じところから見た風景の中
にいる人の動きをリアルタイムで模倣する様子を記録
した映像。2012年に奈良のアートリンクプロジェクトの
協働制作の中で生まれた方法を、台北にあるTreasure
Hill Artist Villageへのアーティスト・イン・レジデンス
の機会に異なる状況の上で行なった。台北の様々な公
共空間の中で、リサーチ過程で出会った人々の中から
パフォーマーを選び実行した。

展覧会名：Synchronized to the scene

展示場所：Treasure Hill Artist Village Cross Gallery

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

2022
(2012)



作品タイトル：2022(2012年)

形式：インスタレーション、会話

素材：アルミホイル、照明

解説：滞在先のTreasure Hill Artist Villageは台北の都市の再開発の流れの中で作られており、リサーチの中で、先に住んでいた住人の居住期限が2022年だということを知った。そのことについての会話を促す装置として展示会場の一角に「2022」の文字を作った。

展示会名：Synchronized to the scene

展示場所：Treasure Hill Artist Village Cross Gallery

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

the Basic Income Game COWRY
(2014)

Basic Income Kyoto
(2013-)



作品タイトル：the Basic Income Game COWRY(2014年)

形式：カードゲームとそれを用いたワークショップ

解説：Basic Income Kyotoによる協働制作。
ベーシックインカムという社会保障、経済政策に関わるアイデアをカードゲームを通して体験し、様々な会話や意見の交換を促すワークショップをBasic Income Kyotoというグループで開催した。

イベント名：The Basic Income Game COWRY
リリースパーティー

イベント会場：Social Kitchen

主催：Basic Income Kyoto

その他共催など：名古屋市立大学(カードゲーム作成に関して)

プロジェクトタイトル：Basic Income Kyoto(2013-)

プロジェクトの場：Social Kitchen、同志社大学など

プロジェクトの主体の構成：自主的な勉強会のような形で集まったグループ。最初のミーティングは2013年春。月2回ほどのミーティングを行った。各メンバーの関係は原則フラット。

その他共催など：名古屋市立大学
(カードゲーム作成に関して)

備考：2014年のカードゲーム完成後のワークショップ開催後、集まり自体の頻度は減る。しかし正式に解散のような形はとっていない。

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

西成区単身高齢生活保護受給者の為の
社会的繋がり作り事業
ひと花プロジェクト 美術の時間
(2013-)



プログラムタイトル：ひと花プロジェクト「美術の時間」
(2013年～2018年3月現在)

形式：月1回のワークショップ講師としてプログラム運営に参加

解説：2013年から月に1回、ひと花センターの登録者を対象に1時間半から2時間のワークショップを行なっている。内容は状況に応じて変わるが、様々な人が入りやすい「絵」を描く事を中心に、簡易な版画や染物なども行なっている。2014年は一年間かけて室内壁画(壁紙)の制作を行なった。

プロジェクトタイトル：西成区単身高齢生活保護受給者の為の社会的繋がり作り事業(2013年～)

プロジェクトの場：ひと花センター

プロジェクトの主体の構成：「ひと花センター」自体は5人弱のスタッフ(常勤非常勤含む)が運営しており、各NPOと連携を取りながら事業を行なっている。「表現プログラム」はNPO法人こえとことばとこころの部屋がコーディネートを行い、月1回(一部隔月)のプログラムを複数行なっている。

事業主幹：大阪市西成区保健福祉課

事業受託者：ひと花プロジェクト連合体

構成団体：NPO法人釜ヶ崎支援機構(代表)
NPO法人こえとことばとこころの部屋
NPO法人生活サポート釜ヶ崎
NPO法人 HEALTH SUPPORT HINATA
NPO法人 まちづくり今宮

備考：正式名称の通り、大阪市西成区に住む、単身、高齢(65歳以上)、生活保護受給者の為の社会的繋がり作り事業の一環として行われている。この地域の現状の問題と結びついており、中心となる参加者は上記の条件を満たす登録者になる。あくまで「美術の為の場所」ではなく、「社会的繋がり作り事業の中の美術のプログラム」。講師は基本的には各プログラム内の「内容」を担当するが、講師のミーティング、コーディネーターへの連絡などを通して、その他の枠組みなどにも意見は可能。

CITY IN MEMORY -記憶の街-
(2013-2014)



作品タイトル：記憶の部屋／記憶の倉庫
(2014年)

形式：一日1名限定の予約制長期間滞在による体験／ツアー

解説：再開発計画の進む団地でのプロジェクトを協働で企画・運営した。廃墟や空き家のみ場所ではなく、居住者のいる団地でのプロジェクトであることが大きな特徴で、その一室をチームで間借りしてプロジェクトを組み立てた。メインとなるプログラムは「記憶の部屋」。制作やリサーチ過程で団地の住人から借りた「物」とそれについての「エピソード」を集め、それらを使って設えた団地の一室で夜を明かす体験ができる、一回1名限定の予約制のプログラムを作り、運営した。

プロジェクトタイトル：CITY IN MEMORY -記憶の街
(2013-2014年)

プロジェクトの場：堀川団地

プロジェクトの主体の構成：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAの企画で行われた若手芸術家育成の為のワークショップ。ゲスト講師にNPO法人BEPPU PROJECTの山出淳也氏を招き、若手作家によるチームが企画・運営を行なった。作家は、野原万里絵、前川紘士、井上大輔、菊川亜騎、谷澤紗和子、谷本真理、朴星桓、矢津吉隆、AT PAPER(金成基、國政聡志、中望、三重野龍)。

主催：京都市立芸術大学、文化庁

共催：公益財団法人京都市芸術文化協会
(京都芸術センター)

協力：京都府住宅供給公社、京都市、京都府、
堀川COMMON、都市居住推進研究会、
堀川団地のみなさん

備考：文化庁委託事業平成25年度「次世代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

Hands projection_
Models of scale connector
(2015)



作品タイトル：Hands projection_Models of scale
connector(2015年)

形式：ペーパークラフト、原型

素材：粘土、ペーパークラフト／ダンボール、アルミテープ

解説：両手のひらサイズの粘土から作った原型の表面を分割
して作ったペーパークラフトと、5種類のペーパークラフ
トを様々なサイズで作ったものを組み上げたモデル。

展覧会名：Scales, others

展示場所：Gallery PARC

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

50 twice_Space of hands
(2016)



作品タイトル：50 twice_Space of hands(2016年)

形式：彫刻

解説：両手のひらサイズの素材を使って作った立体を50個乗せた天板を、同量同種の素材で2つ提示した。

展覧会名：ART 1 : Stepping into fresh snow

展示場所：ARTCOURT Gallery

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

HAPPY SPOT FUTURE
「D50」の時間 remix
(2017)



作品タイトル:「D50」の時間 remix(2017年)

形式:協働制作とその成果・記録の展示
(映像、写真、ドローイング、陶芸、記録の展示)

解説:那須大輔との協働制作。6年前のHAPPY SPOT NARA2011-12で出展した「D50の時間」の再展示依頼からスタート。前回搬出後に、協働制作の両者と舞台になった福祉施設の3者に分けて作品を保管していたが、多くが紛失していた為、残ったものを使っての制作の更新と、記録の展示形式を更新して出展した。

展覧会名:HAPPY SPOT NARA FUTURE

展示場所:奈良文化会館

プロジェクトタイトル:HAPPY SPOT FUTURE(2017)

プロジェクトの場:オープンスペースAYUMI、
社会福祉法人わたぼうしの会、
奈良文化会館

プロジェクトの主体の構成:プロジェクトのスタートが再展示依頼だったため、HAPPY SPOT NARA 2011-2012の協働制作の時のようなコーディネーターの役割は存在せず。結果的に生まれた協働制作には社会福祉法人わたぼうしの会などが協力してくれるかたちとなった。

主催:奈良県

協力:社会福祉法人わたぼうしの会、清水啓一

備考:「第32回国民文化祭・なら2017」、「第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会」の一環として行われた

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

ひと花かまがさき芸術資料庵 2017
※共同企画
(2017)



プロジェクトタイトル：ひと花かまがさき芸術資料庵2017
(2017)

プロジェクトの場：ひと花センター

プロジェクトの主体の構成：ひと花センターの表現プログラムの講師の中から任意で企画を構成。ひと花センターとの共同で開催した。

主催：ひと花センター、かまがさき芸術資料庵

備考：「ひと花センター」の「表現プログラム」の中で作られる作品(絵、書、詩を中心に)を用いて、それらを広く公開し、今後どのように扱うかを内外で探る為の企画を「かまがさき芸術資料庵」という任意団体を作り、ひと花センターと協力して開催した。会期中には哲学や散歩といったその他のプログラム、地域向けのイベントも広く一般公開された。社会的繋がり作りの事業の中で位置付けが曖昧な「プログラムの成果物として生まれる作品」について、改めて考える機会となった。

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M

H

作品群=資料群例



社会の中で制作される、または集められている作品を、自律した「作品」とすると同時に、その作品の周りの何かを指し示す「資料」でもある二重の性質を持ったものとして捉え、どのような「作品群=資料群」があるか、またどのような成り立ちでその「作品群=資料群」が形成されているのか、そこにどのような関係や力学が働いているのかについてのリサーチを行う。作品が作られている、または保管されている様々な場所や領域についてのリサーチを行い、具体的に取材に行くことができる場所には足を運び、個別の「作品群=資料群」と、それらを取り巻く環境やそのあり方についての情報を拾い集める。また、それらの場所や領域の背景に関するリサーチも同時に進める。

現在(2018.3.31時点)での公開は、H-2の教育関係[H-2-1 ARTCA 芸術教室 岸和田教室(私塾)とH-2-2 高槻市立第3中学校(公教育)]の2箇所。他の項目の資料はリサーチが一定以上進んだ段階で更新され、必要に応じて項目の再整理も行う。

H-2-1

作品群=資料群例

ARTCA芸術教室 岸和田教室 (私塾)



保管作品・資料1(一部ブログより転載)



1 子ども～中高生クラス
課題名「点描と観察」(2018)



2 一般クラス 制作中の作品(2018)



3 冬のイメージ 中高生クラス(2018.2.1ブログより)



4 冬のイメージ 中高生クラス(2018.2.1ブログより)



5 小学校2年生 (2016.12.12ブログより)



6 (2016.12.12ブログより)



7 (2016.3.16ブログより)



8 (2016.3.16ブログより)

※写真提供：ARTCA芸術教室
稲垣智子さん
ARTCAアートカ芸術教室ブログ
<http://blog.livedoor.jp/artca>

制作・保管環境、資料



1 制作スペース 机を折りたたみ、収納するなどしての使用も可能



2



3



4



5 収納スペースに製作中の作品や素材を保管



6 2012年夏から季刊で発行している新聞「ARTCA NEWS」

※写真提供：ARTCA芸術教室
稲垣智子さん

ARTCA芸術教室
主宰：稲垣 智子さん
運営歴：2011年夏～
取材日：2018年1月27日(土)※写真有り

取材同行：吉原 enoco

ARTCA芸術教室 岸和田教室
住所：596-0045
大阪府岸和田市別所町1-2-13

[取材経緯、概要]

12月末に行なった大阪府府民文化部の寺浦さんとのミーティングで、岸和田市に住むアーティストの稲垣智子さんが子供を対象とした芸術教室を主宰していることを知る。美術教育に関する人物は既に友人・知人の中にも複数人いたが、個人的面識の無い稲垣さんへの取材をまず行うことで、質問項目の洗い出しも含め、自分の知りたいことがより明確になるのでは無いか、という期待もあり、最初に取材をお願いすることにした。

午後から約2時間の取材では、最初にプロジェクトの概要や現時点の段階を説明し、稲垣さんから大きく4つ(1.きっかけ 2.仕組み 3. 作品の保管管理・運用運営 4. 目標やニーズ)についての話を聞いた。終盤に一部意見を交わし、取材時点で制作場に保管してあった作品や作品の保管環境を見せて頂いた。

※ここでは、取材当日の録音を後日大まかに書き出したものをベースに前川の視点でまとめたメモを、稲垣さんのチェックを通して公開している。

※作品・制作や保管環境の写真に関して、取材時に公開まで意識した撮影条件を整えられなかったため、後日稲垣さんからご提供頂いた。

[取材内容]

●きっかけ

滞在者が1名のアーティスト・イン・レジデンス・プログラムへの1年間の参加期間(2009～10年、ハンブルグ)を終え、「何か世の中の役に立つ実質的な仕事」について考え東京で仕事をする中で東日本大震災が起こる。それをきっかけに実家のある大阪府岸和田市に戻り、画家だった父親の持ち物だった版画用プレス機の使用を友人の作家と考える中で、版画教室などのアイデアが浮かぶ。社会事業助成金などを見つけ「アーティストが食べていける仕組みを作る」ことを目的とした事業を提案、3人のチームを作り、倍率の高かった1次は合格。2次は落ちたものの、プランに自信をつけて準備を行い、秋に行われた別の女性起業家のビジネスプランのコンクールで金賞を受賞。岸和田市、豊中市、大阪市南森町の3箇所を開始した。2018年1月から岸和田市、豊中市の2箇所の体制に移行し事業を行う。インタビューでは主に岸和田教室について話した。

●仕組み

子供と成人を対象としたクラスがあり、小学生対象の「子供クラス」は週に1回(1コマ1時間半)、「一般クラス」は月に2回と4回(1コマ2時間)を選択できる。木金日の週3回。現時点では各クラス7～8人に対して1人の講師がつく(課題によってはもう一人の講師のサポートをつける時もある)。「子供クラス」は教室が毎週異なる課題を用意し、一斉に取り組む。「一般クラス」は生徒各々がやりたい制作を進めるが、講師と相談して課題を決める生徒もいる。スタッフは現在3名。入れ替わりがある時は公募を行う。2名は最初から同じ。大阪市内から来る人もいれば、岸和田近郊の人も。講師の適正については、子供に対して様々なプログラムを提供するため、方法を限定して制作する人よりも複数の媒体を扱える人の方が向いている部分はある。

学んできたことの背景だけではなく人間力が大きい。

●作品の保管管理・運用運営

>保管

基本的には完成したものは自宅へ持って帰ってもらう。複数回に渡って作っているもの、展覧会がある時は教室で保管。

- ・扉を閉じれば制作環境から見えなくなる箇所に棚を作り、そこに平面作品や画用紙などは整理して仕舞われていた。
- ・画材や制作途中の作品も、基本的には扉の奥に片付けられる様にしている。

>記録

写真での記録は撮り、可能であれば毎回。後で使う/使わないに関係なく。授業が立て込んでいる時は撮れない時もある。一眼レフなどは必要であればその時に撮ればいいので、基本的にはポケットにスマホで充分。選んだものを、新聞やブログに掲載している。

>公開・展覧会

・展覧会

岸和田市立の会館(岸和田市自泉会館)を借りて、1年に1回展覧会をする(2012年から)。

目的:いろんな人に見てもらって、いろんな人に意見を聞く。発表しないと上手くならない。

>公開・コンクール

コンクールに出すこともある。難しい部分もあり、良いと言われる絵が、必ずしも良いわけではない。賞を取って嬉しい子は良いけれども、本当に好きなものを見失ってしまうかもしれない、という部分もある。見失うのがいけないという訳でもなく、それも一つの過程としても見ることが出来る。ただ小さい子供の場合は、(評価が)審査員によるということまで分からない部分もあるので難しいところもあるが、賞を取って喜ぶ子もいるので出している。

>公開・新聞/ブログ

季刊で年4回発行。2012年夏から。現在(2018年1月)で23号。教室内で配ることがメインで、展覧会場に置いたりすることもある。フリーペーパーの様な地域への配布はしていない。保護者へ授業の内容を伝えることができる。展覧会や記事を通して、アートの広がりや伝えられる。

子供はここに載ることも嬉しい。

ブログも公開している。

>公開・その他

直接教室の展覧会ではないが、稲垣さんが作家として岸和田で展覧会を行うことで、岸和田市や地域との繋がりが生まれてきている面もある様子。

岸和田文化事業協会や岸和田市文化国際課との展覧会。

2014年の岸和田市周辺の作家を集めたグループ展や、2017年の岸和田市でのアートプロジェクトのコーディネートなどを行なった。

教室をやっていることで子供たちに伝え親に行くことが出来る。

岸和田はまだ現代アート未開の地だから面白い。

●目標やニーズ

「創造できる人になってほしい」という思いがある。
技術の発展などの理由から様々な職が今後無くなると言われる中で、創意工夫しこれで代用できる、といった考え、力を持った人になってほしい。
自分で様々なことが作れることを知っていて、それを活用し、新しいことを発明し、自分で考えられる人になってもらえたら。

「子供クラス」は絵を描くのが好きで来ている子供が多い。受験対応の様な内容は基本的には行わず、専門的な予備校を進めている(多くの事例を見ることのできる環境の方が良い、との理由から)。ただし、岸和田市内には美術予備校がないので、出来る範囲であれば対応している例もある。
「一般クラス」は様々な方がいるが、20代、30代の人も一定以上おり、男性も女性もいる。教室に来る理由も「落ち着いた時間が欲しい」「癒される(絵を描いていると)」「ものを作るのが好き」と様々。

〔所感〕

活動全般に関して、実際の教室の様子は見る事が出来なかったが、教室の規模や頻度から展覧会やコンクールの位置付けや新聞などの媒体など、芸術教室としての活動の流れを聞くことが出来た。経緯や姿勢など、共感を持って聞くところも多かった。

「作品の管理や運用」に関しては、「基本的には持ち帰ってもらう」とのことだった為、作品の取り扱いに関しての特殊な事例を聞くことはできなかった。

お互いの活動や関心のある程度知った段階で終盤に交わした意見交換の中に、未整理だが気になるポイントがいくつか見つかった。例えば、「芸術教室」と「福祉施設」を並べて見た時に浮かび上がる異同について。「私塾としての美術教育の場」と「生活介護/就労支援の場」の中でのスタッフと利用者との関係やその間にあるプログラム、介入のあり方や目標とするもの、自律や仕事といった単位について。

[2018.3.21]

H-2-2

作品群=資料群例

高槻市第三中学校(公教育)



保管作品・資料1
(高槻市第三中学校美術部)



1 毎日朝描かれるデッサン



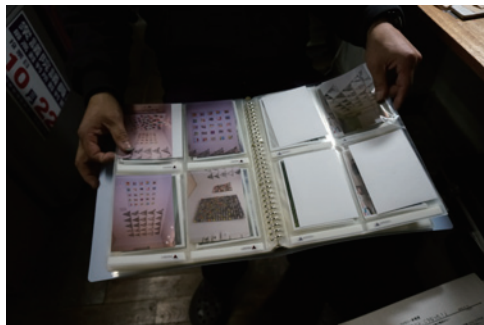
2



3 廃棄地図を支持体として流用



4 技術の時間の授業作品への装飾



5



6 生徒のデザインした図柄入りの手製封筒



7

保管作品・資料2
(これまでの赴任校含む)



1 教員として初期の頃の課題(生徒作品)



2



3 立体バズル見本作品



4



5



6 フィルム写真による参考写真の記録



7

A
B
C
D
E
F
G
H-2-2
I
J
K
L
M

制作・保管環境、資料



1 第一美術室、美術準備室前



2 教室横の展覧会などのDMが集められたスペース

A
B
C
D
E
F
G
H-2-2
I
J
K
L
M

第1美術室(美術部制作室)



1 教室全貌



2



3



4 トイレtpペーパーの芯によるユニット型作品



5



6 集められたデザイン系、美術系雑誌や書籍



7 素材のストック



8



9 教室内のデッドスペースにも作品や素材を保管

A
B
C
D
E
F
G
H-2-2
I
J
K
L
M

美術部準備室



1 準備室には参考作品や展覧会情報など、様々な資料が保管されている。



2



3



4

A
B
C
D
E
F
G
H-2-2
I
J
K
L
M

高槻市第三中学校
美術教諭/美術部顧問
児玉 泰さん(57歳)

取材日:2018年1月28日(日)※写真など
無し/2018年2月19日(月)※写真有り

高槻市第三中学校
住所:大阪府高槻市芝生二丁目

【取材経緯、概要】

「絵(作)の生涯」「広く社会の中で絵(作品)が生産され、管理・機能する場」を考える際、真っ先に思い浮かぶ場所の一つが「教育機関」であり、「学校」という場所だった。滞在製作中の情報収集の中で、全く別の複数人からの推薦があった大阪府高槻市にある高槻市第三中学校の美術教諭 児玉泰先生を訪ねた。

高槻市内のギャラリーにて美術部の生徒の展覧会が開催されており、2018年1月28日(日)に伺い、日を改めて2月19日(月)の晩に学校を訪れた。

美術準備室、第1美術室、第2美術室があり、それぞれに生徒の作品と画材や素材、様々な資料が置かれていた。

【内容・特徴】

定年を控えた児玉先生は、大阪府高槻市内の複数の中学校(支援学校を含む)に赴任され、23歳からの最初の9年と2012年から現在までの6年間、高槻市第三中学校で美術を教えてこられた。これまでは他の赴任校も合わせ、美術部の顧問にはならなかったが、今回の赴任で初めて美術部を持つことになった(それまではラグビー部とバレーボール部)。今回の赴任前は支援学校(3年間)。

当初美術部の生徒は自分の好きなものしか描かず、発表の機会もほとんどなかったとのことだが、児玉先生が再赴任後2年目(2013年)より美術部の顧問になり、現在に至る方向性を作っていた。

その際「大人に向けて」部活動を行うこと意識した、とのこと。子供だけだと、自分たちの好きなものを描いてそこで終わってしまい、周りからの評価も本人たちの自己評価も低い状態になってしまう。展覧会などの発表の機会を内外で積極的に持たせ、大人の美術やデザインの世界を見せること(雑誌などの資料、展覧会の情報などの提供)を促していた。また中学1年から3年まで、受験のためなどではなく自分のために朝練としてデッサンを毎日行い、毎日絵を描くことを課している。現在までに、ギャラリーの協力や地域のコミュニティー冊子やケーブルテレビでの取材なども受け、地域の芸術祭への出展も計画している。

学校内で閉じてしまわない活動やその他について、大阪府下の福祉施設「アトリエ インカーブ」、京都のギャラリーの「モーネ・コンビス」の活動、指導者としては元大阪府教員の谷山育さんの影響についても話されていた。

小学校での図工などの教育が必ずしも専門性を持った教員が見るわけではない為手薄になりがちで(担任が独学で教える例も多い様子)、その立て直しを中学校で行っている面もある、とのこと。

材料費などは学校予算の中ではほとんどなく(年間一人700円)、部費は取らない方針(ラグビー、バレー部でもそうしていたとのこと)。その代わり、学校のあらゆるところから不要になった素材に使いそうなものを集めて転用し、活用している。

【作品と資料について】

授業で制作した作品は基本的には生徒の自宅に持って帰らせているが、一部作品は参考作品として保管している。

参考作品は、これまでの赴任校での作品も合わせて美術準備室に保管してある。

また、デジタルカメラが無かった頃から生徒作品の写真での記録(写真)も撮っており、記録への意識の高さが伺えた。美術部の大きな共同制作した作品などは、美術室の中や校内の空いているスペースに保管、機会があれば展示に組み込まれたりもしている。管理は児玉先生が行なっている。

課題によっては、簡易の作品集のようなものをフリーペーパーとして作り、機会を見つけて学外で配布し、記録と広報が重なったような活動もされている。

美術部内と一部ギャラリーなどに配布というのが、主な流通路。展覧会以外での、記録などに関する学校間の特別なネットワークはない様子(中学同士、あるいは前後の小学校から高校への流れなど)。

【所感】

学校教育の現場として、一人の教員の熱量や力が大きく状況が変化するという事例を見ることができた。

資料や作品、これまでの経緯など情報がとても多く、全てを見たわけでも、見せてもらったものを整理して理解できているわけでも決まてないが、作品や成果を如何に活用し、生徒や教育環境を良くする為の方法がないか常に模索されている印象を受けた。

初めての赴任の頃から、記録を取るという意識を持たれていたことも印象深い。

時代に位置付けると、1980年代の中学校に新任として入り、他校への赴任も経てこられる中で、学校や美術の環境の変化を見てこられたのではないか。

フィルム時代の記録に注目して再び取材させてもらうことも考慮に入れたい。また、他の仕事やワークショップとの関連から、支援学校、特別支援教育についての現場の意見なども尋ねたい。

[2018.03.16]